

幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究(1)

—情動の年齢別特徴—

○本郷一夫(東北大学)
平川久美子(石巻専修大学)

飯島典子(宮城教育大学)
高橋千枝(東北学院大学)

キーワード: 情動発達, 行動特徴, 幼児

問題と目的

本研究は、幼児期から児童期における情動発達のアセスメント・スケールを開発することを目的とした研究の一部である。児童期の情動発達の特徴、典型発達児と「気になる」子どもの違いなどについては本郷他(2017, 2018)で述べた。そこで、本報告では、幼児期の情動発達に関する調査の結果に基づき、幼児の情動発達の年齢的特徴を明らかにすることを目的とした。

方法

1. 調査対象: 保育所, 認定こども園の担任に、クラスに在籍しているすべての子ども(障害児保育の対象児は除く)について評定を求めた。本報告では、回収された16園1068名(4歳児352名, 5歳児381名, 6歳児335名; 男児526名, 女児542名)のデータを分析した。

2. 調査時期: 2019年1月~2月。

3. 調査内容: (1) 情動発達: 「喜んでいることを表情で表現する」<表情による表現>, 「悲しんでいることを言葉で表現する」<言葉による表現>, 「怒っている気持ちを抑える」<抑制>, 「自分ができることに誇りをもっている」<誇り・恥>, 「友だちの悲しい気持ちがわかる」<理解>, 「友だちのうれしい気持ちを自分のことに」<共感>, 「ちょっとしたことで驚く」<過敏さ>などの情動に関する7領域20項目について、「全くない」(1)~「よくある」(5)の5段階で評定してもらった。

(2) 行動特性: 「自分が行った行動を認めようとせず、言い訳をする」(<対人的トラブル>), 「他のことが気になって、保育者の話を最後まで聞けない」(<落ち着きのなさ>)などの「気になる」行

動17項目について、「全くない」(1)~「よくある」(5)の5段階で評定してもらった。

結果と考察

1. 情動発達得点: 情動の領域ごとに、子どもの年齢の一元配置の分散分析を行った。その結果、Table1に示すようにすべての領域において、年齢間に5%水準で統計的有意差が認められた。とりわけ年齢間の差が大きかった領域として、<表現(表情)><表現(言葉)><過敏さ>では4歳児の得点が高く、<抑制><恥・誇り>では5, 6歳児の得点が高かった。

2. 項目別の特徴: 情動発達に関する項目20項目中13項目で統計的有意差が認められた。とりわけ、<表現(表情)>の「怒っていることを表情で表現する」「悲しんでいることを表情で表現する」において5, 6歳児に比べ4歳児の得点が高くなっていた。また、<抑制>の「怒っている気持ちを抑える」「悲しい気持ちを抑える」は4歳児に比べ5, 6歳児で得点が高くなっていた。さらに<誇り・恥>のうち、「自分ができることに誇りをもっている」は4歳児に比べ5, 6歳児で得点が高くなっていた。

以上の結果から、感情の表現は4歳児をピークに次第に減少すること、むしろ年齢が上がると感情の抑制が発達することが示唆された。しかし、抑制は6歳になっても十分には発達していないことが考えられた。

付記

なお、本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)「幼児期・児童期の情動発達アセスメント・スケールの開発と保育・教育への応用」(研究代表: 本郷一夫)の助成を受けて行われた。

Table 1 年齢別の情動発達得点

情動領域/年齢	4歳	5歳	6歳	分散分析と多重比較(Bonferroni)の結果
表現(表情)	4.32	4.02	4.04	$F=17.50$, 多重比較[5, 6歳<4歳]
表現(言葉)	4.02	3.78	3.85	$F=7.11$, 多重比較[5, 6歳<4歳]
抑制	2.44	2.74	2.65	$F=13.54$, 多重比較[4歳<5, 6歳]
誇り・恥	3.65	3.81	3.81	$F=5.29$, 多重比較[4歳<5, 6歳]
理解	3.89	3.78	3.91	$F=3.10$
共感	3.15	3.31	3.30	$F=4.20$, 多重比較[4歳<5歳]
過敏さ	2.78	2.57	2.55	$F=6.27$, 多重比較[5, 6歳<4歳]

* $df=2, 1065$